筑紫女学園大学

一般選抜出題のねらい

国語

●出題のねらい

本学のAP（入学者受入れの方針）ならびに高等学校学習指導要領に示される国語の目標や内容に準拠し、知識・技能、思考力・判断力・表現力ならびに大学で必要とされる国語の基礎力を多角的・総合的に問う内容を出題します。

●出題形式・分野

現代文（論理的な文章、文学的な文章、実用的な文章など）から２題と古典より古文１題（漢文は除く）を、高校の学習範囲内で出題します。また一つの題材だけでなく、異なる種類や分野の文章などを組み合わせた複数の題材による問題が含まれます。

なお、解答の形式は、選択方式と記述方式を併用します。

英語

●出題のねらい

本学のAP（入学者受入れの方針）ならびに高等学校学習指導要領に示される英語の目標や内容に準拠し、知識・技能、思考力・判断力・表現力ならびに大学で必要とされる英語の基礎力を多角的・総合的に問う内容を出題します。

●出題形式・分野

異なるタイプの英文（会話、メールや手紙、物語、エッセイ、掲示物、図表等を含む説明文、その他）を使った問題を２問出題します。英文から必要な情報を読み取る力や、概要や要点を把握する力等を問うものとします。英文に則して、自分の考えを理由をつけて説明する設問も含まれます。なお、従来行ってきた「発音、アクセント、語句整序などを単独で問う問題」は出題しません。またリスニングテストは行いません。

歴史総合、日本史探究

●出題のねらい

本学のAP（入学者受入れの方針）ならびに高等学校学習指導要領に示される地理歴史の目標や内容に準拠し、基礎的な知識・技能の定着度を測るとともに思考力・判断力・表現力を問う内容を出題します。その際、歴史に関わる事象を多面的・多角的に考察する過程を重視し、用語などを含めた個別の事実等に関する知識のみならず、歴史的事象の意味や意義、特色や相互の関連等について、日本史を中心に総合的に考察する力を問います。

●出題形式・分野

日本史探究から２題、歴史総合から日本史分野と世界史分野それぞれ２題を高校の学習範囲内で出題します。なお歴史総合の2題については、どちらかを選択して解答するものとします。解答の形式は、選択方式と記述方式を併用します。

（大問1と2）日本史探究から出題（大問3-1）歴史総合のおもに日本史分野（大問3-2）歴史総合のおもに世界史分野

※大問3-1と大問3-2はどちらか選択

公共、政治・経済

●出題のねらい

本学のAP（入学者受入れの方針）ならびに高等学校学習指導要領に示される公民の目標や内容に準拠し、基礎的な知識・技能の定着度を測るとともに思考力・判断力・表現力を問う内容を出題します。その際、文章や資料を的確に読み解きながら基礎的・基本的な概念や理論、考え方等を活用して考察する力を問います。

●出題形式・分野

公共の領域から1題、政治・経済のうち政治的分野から1題、経済的分野から1題の３問構成とします。解答の形式は、選択方式と記述方式を併用します。

数学Ⅰ

●出題のねらい

本学のAP（入学者受入れの方針）ならびに高等学校学習指導要領に示される数学の目標や内容に準拠し、基礎的な知識・技能の定着度を測るとともに思考力・判断力・表現力ならびに大学で必要とされる数学の基礎力を多角的・総合的に問う内容を出題します。

●出題形式・分野

学習指導要領に基づき、数と式（集合と命題を含む）、図形と計量、二次関数、データの分析から各1題出題します。内容は、高校教科書の例題・練習問題レベルを中心に章末問題レベルまでを含みます。解答の形式は、答えのみの記述式とします。

情報Ⅰ

●出題のねらい

本学のAP（入学者受入れの方針）ならびに高等学校学習指導要領に示される情報Ⅰの学習の目的や内容に準拠し、基礎的な知識・技能の定着度を測るとともに思考力・判断力・表現力ならびに大学で必要とされる情報の基礎力を多角的・総合的に問う内容を出題します。

●出題形式・分野

学習指導要領に示された4つのカテゴリー（①情報社会の問題解決②コミュニケーションと情報デザイン③コンピュータとプログラミング④情報通信ネットワークとデータの活用）からそれぞれ大問形式で出題します。プログラミング言語はDNCL（共通テスト手順記述標準言語）を使用します。なお、解答の形式は記号記入式（数字か記号の記入）とします。

※この2025年度入学試験問題集には、2026年度入学者選抜の試験科目で実施予定の「国語」「英語」「歴史総合、日本史探究」「公共、政治・経済」「数学Ⅰ」「情報Ⅰ」を掲載しています。「地理総合、地理探究」と「歴史総合、世界史探究」の試験問題をご希望の方は、入試・広報班（TEL：092-925-3591）へお問い合わせください。

国語

前期日程

一般選抜
一般・共通テスト併用型選抜

時間＝70分

（解答：34ページ）

［一］ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお設問の都合で本文の段落にⅠ～Ⅷの番号を付しています。

Ⅰ 実験と理論とは、車の両輪のようなものであるとよくいわれるが、自然科学の正道は、実験と理論とが並行して進んで行くところにある。この両者のバランスによって、自然科学は発達する。ア このことは、もちろん前から誰でもいっていることであるが、ここでは理論というものの意味を、もう少し立ちいって考えてみよう。

Ⅱ 実験によって、もののある具体的な性質、あるいは現象間のつらなりが知られたとしても、それだけでは学問とはいえない。いわゆる学問の定義の中にはいるには、そういう知識に、ある体系が組立てられなければならない。体系ができてはじめてそれが役に立つことになる。

Ⅲ ところで、いろいろ雑多な個々の知識に体系をつけるという場合に、イ 二つのやり方 がある。その一つは、こういう知識を、整理することである。たとえば、分類するということも、一つの体系をつくることである。事実そういうことも、決してばかにはならないのであって、古典的な動物学や植物学の中で、いわゆる分類学といわれている部門なども、a アンガイ 役に立っているのである。この頃は、そういう学問があまりはやらないので、何か初歩の学問のように思われている傾向もあるが、実際にはああいう知識が、大いに役に立っているのである。

Ⅳ しかしそればかりでは、もちろん今日われわれのいう学問の体系にはならない。今日学問の体系といわれているものは、いろいろな個々の知識を整理するだけでなく、(注1)綜合したものである。自然現象というものは、複雑ではあるが、連続した融合体である。それをいろいろな方面から見て、いろいろな知識を得る。そういうたくさんの知識を、一つの綜合した知識に組み立てることが体系をつくることである。ところでウ そういう体系を作ることによって、何か得るところがあるかというと、それは大いにあるのである。多くの知識をただ寄せ集めたばかりでは、あまり役に立たない。しかしほんとうにこれを有機的に綜合すると、学問の次の発展をうながすという、非常に大切な役目をすることになる。

Ⅴ 発展といっても、いろいろな意味があるが、その中で一番はっきりしているのは、いわゆる予言ができることである。もっとも予言がぴったりできる場合はめったにないが、(注2)少なくも方向を指示できるということは、始終ある。いろいろな知識を綜合することによって、抜けている部分に気がついたり、あるいは先に発展しそうな方面が分ったりする。そしてその方向に新しい研究を踏み出す。そういうことが、非常に大切なのであって、事実そういうふうにして、今日の自然科学は発達してきているのである。これは科学のすべての分野において行われていることである。ここではまずその中の代表的な場合、すなわち科学における予言ということについて、少しb コウサツ をしてみよう。

Ⅵ ある方面で、いろいろな知識が得られたとき、それを綜合してみると、今までの一つ一つの知識では気がつかなかったことが、何か次の段階に予期される。そこでこういうことがあるはずだと予言ができ、それを実験でたしかめてみる。そして A どおりに、ぴったり当ったとする。そうなれば何人といえども、その B を信用せざるを得なくなる。こういう A をして、それが後に実験によって確かめられた例はかなりあって、いわゆる科学の勝利として、あげられているわけである。

Ⅶ その非常によい例は、ニュートン力学において、既によく知られている。太陽のまわりに、地球やその他いろいろの遊星がまわっている。この遊星の運動は、万有引力、すなわち距離の二乗に逆比例し、二物体の質量の積に正比例する引力に起因しているというのが、ニュートン力学である。ところがこの万有引力の法則をつかって、実際に地球とか、木星とか、土星とかいうものの運動を計算してみると、少しずつ狂っているのである。この計算は、万有引力が太陽と地球との間、太陽と土星との間というふうに、二体間に働くものとしてやってある。ほんとうは、そのほかに、太陽にくらべれば非常に弱い力ではあるが、遊星同士の間にも万有引力がはたらく。その影響を計算して、補正をすると、遊星の運動がもっとくわしく出せる。

Ⅷ そういう計算をくわしくやっていくと、だんだんよく合ってくるのであるが、それでも当時太陽から一番遠い遊星と思われていた天王星の運動は、どうしても計算と合わない。それで天王星よりももっと向こうに、今まで知られなかった遊星があるのかもしれないと考えた。 X この海王星の発見は、ニュートン力学の非常に力強いサポートになった。こういう予言は、万有引力の理論の力を借りなくては、とうていできない。この予言が、的中したということは、この理論の何よりも強いサポートである。そこでニュートンの力学が、非常な勢いで、物理学c ゼンパンに強い影響を及ぼすことになった。

（中谷宇吉郎『科学の方法』による。一部改変）

（注）1 綜合――――個々のものを一つにまとめること。総合。
2 少くも――――少なくとも。

問1 波線部a～cのカタカナの部分を、漢字で記しなさい。

問2 傍線部ア「このこと」とは、どのようなことですか。文中の言葉を用いて三十字以内で説明しなさい。ただし、句読点を含みます。

問3 次の（1）～（6）を読んで、傍線部イ「二つのやり方」について、そのどちらかに合致するものには○を、どちらにも合致しないものには×を記しなさい。

（1） 実験すること。
（2） 分類すること。
（3） 運動すること。
（4） 連続した融合体の自然現象を、いろいろな方面から見て、いろいろな知識を得ること。
（5） いろいろな個々の知識を整理するだけでなく、一つの綜合した知識に組み立てること。
（6） 多くの知識を寄せ集めて、大いに役に立つ初歩の学問として、有機的に綜合すること。

問4 傍線部ウ「そういう体系を作ることによって、何か得るところがあるかというと、それは大いにあるのである。」とありますが、このように言えるのはなぜですか。その理由について、傍線部ウの内容に対応して説明している一文をⅤ段落から抜き出し、はじめと終わりの七字を書きなさい。ただし、句読点を含みます。

問5 空欄A・Bに入る最も適当なものを、次の①～④のうちからそれぞれ一つずつ選び、解答欄にマークしなさい。

A・Bには、異なる選択肢が入ります。

① 理論　② 実験　③ 予言　④ 知識

問6 空欄Xには、次の枠内のC・D・E・Fの四つの文が入ります。これらの文を意味が通るように並べた順序として正しいものを、後の①～⑥のうちから一つ選び、解答欄にマークしなさい。

C　こういう計算をして、何月何日の何時何分に、どの方向に望遠鏡を向けていたならば、そこにその遊星が見えるはずだという予言をした。
D　これが海王星である。
E　そしてもしそんな遊星があって、その影響のために、この狂いが出たとすると、どういう距離のところに、どういう遊星があればよいかということが計算できる。
F　そしてそのとおりにやってみたら、はたしてそういう遊星が見つかったのである。

① C→E→D→F
② E→F→D→C
③ D→F→C→E
④ F→D→E→C
⑤ C→F→D→E
⑥ E→C→F→D

問7 本文の内容に合致するものを、次の①～⑤のうちから**二つ**選び、解答欄にマークしなさい。

① 自然科学の正道は、車の両輪のようなものであるといわれている実験と理論とが、並行して進んで行くところにある。
② 実験によって現象間のつらなりを知ることができるが、学問の定義の中にはいるには、実験よりも知識の方が大切である。
③ 多くの知識を有機的に綜合した学問の予言により、古典的な動物学や植物学の中で、はやらない学問の分類学が誕生した。
④ ニュートン力学の影響により太陽の働きが弱まったため、地球やその他いろいろの遊星の運動が狂い計算が補正された。
⑤ 海王星は、理論にもとづく予言を実験により確かめた結果発見されたもので、ニュートン力学の力強いサポートになった。

二　次の本文A・B・Cを読んで、後の問いに答えなさい。Aは石垣りんの詩、Bは石垣りんによる自作解説、Cは評者・安藤靖彦による鑑賞文です。

A

シジミ　　石垣りん

夜中に目をさました。
ゆうべ買ったシジミたちが
台所のすみで
口をあけて生きていた。

「夜が明けたら
ドレモコレモ
ミンナクッテヤル」

鬼ババの笑いを
私は笑った。
それから先は
うっすら口をあけて
寝るよりほかに私の夜はなかった。

B

この詩につけ加える、なにもないのに弱りました。これは、これだけのものです。見たままを書きました。

説明は繰り返すだけのことになりますが、「夜中に目をさました。」という最初の一行が、もしかしたらわずかなフィクションかも知れません。ずっと起きて仕事をしていて、ふと台所へ立った。実際はそうだったように思います。Iその通りに書き出したのでは、間のびた表現になります。

きのう買っておいたシジミが、流しの片隅、器の水の中で口をあけて生きていました。ビニール袋に入れられたひとふくろのシジミは、五十円で七、八十粒もあったでしょうか。

ああ生きているみんな。ここがどこであるかも知らず、無名も無名、シジミであることさえ、シジミ自身には関係なく精一杯生きている。あと何時間かたてば、私に食べられてしまうことも知らないで。その私は何だろう？　鬼ババの笑いを笑うしかないではありませんか。夜が明けたら食ってヤル。ひとつ残らず食う鬼のかなしみ、つらさ。いってよければそれがひとつ。

もうひとつは、その鬼さえ、次の瞬間には口をあけてネムルばかりの夜が待っている。そのとき私は、一個のシジミとまったく同じ立場にいることを知らないわけにはゆかないのでした。主題は後の方に傾きました。

C

「シジミ」はよく言われるように怖い詩である。IIただ怖いのではなく読む人の存在をゆさぶって重く怖いのである。「夜中」「台所のすみで／口をあけて生きて」いる「シジミたち」。思うに生きものはいつもこういう形で生きているのではないか。つまり死だとか、a不条理だとか、ほとんど不可解な「夜中」に生きているのではないか。それは幼時の記憶のどこかにこべりついて離れない夜の恐怖としてまず現われるものだ。だが生きるとはそうした不可解なものに手触りすることで証(あか)しされるものではないのか。「夜が明けたら／ドレモコレモ／ミンナクッテヤル」とはIIIそうした怖い生の様態を直感的につかんだ

表現である。「シジミ」も「私」も、まさに生きるという一点で、そういう怖さを呼ぶ手触りをどうしようもなく持つ。こうして生きるものの地獄世界が開く。「鬼ババ」は詩人一人のものではない。けれどその「鬼ババ」もやはり「うつすら口をあけて／寝るよりほか」はないという「夜」を持っている。Ⅳ その自嘲に生への慈悲と哀愁が流れる。それが人をうつ。

こうした生あるもの（もちろん中心は人間だが）への慈悲と哀愁は、いうまでもなく詩人のむしろ厳しい環境と時代とに b 鍛えられたところから生じたものだろう。（中略）つまり彼女は厳しい環境を生活という c 具体相に捉えた。それが表現上の一個のリアリズムに達したと思うが、一方、それが生への慈悲と哀愁を要請したとも言える。けれどもその慈悲なり哀愁なりを一つの文学表現とするには、

自分の住むところには
自分で表札を出すにかぎる。

自分の寝泊りする場所に
他人がかけてくれる表札は
いつもろくなことはない。
（中略）
精神の在り場所も
ハタから表札をかけられてはならない
石垣りん
それでよい。　（表札）

d 凛乎 との凛乎たる自己確立が必要だったのである。Ⅴ「生活詩から生活がはがれ落ちたら、ただの詩になってしまう！」（「生活と詩」）というがその「生活」と「詩」とを緊張と止揚[注1]のうちに持続させるもの、そこにむしろふてぶてしい自己を見てもよかろう。

（安藤靖彦）

（中村稔・三好行雄・吉田凞生編『現代の詩と詩人』による。一部改変）

（注）1　止揚――――二つの矛盾・対立する概念をあわせて、より高い概念に昇華させ、発展させること。

国語 5

問1　波線部a～dについて、次の問いに答えなさい。

（1）a「不条理」・d「凛乎」の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選び、解答欄にマークしなさい。

a　不条理
① 物事の筋道がとおらないこと。
② 迷っていて決断できないこと。
③ 不公平でひとりよがりなこと。
④ 物事の本質を見きわめること。
⑤ 不便で著しく効率が悪いこと。

d　凛乎
① 都合よく物事をすすめること。
② 澄みきって心に曇りがないこと。
③ さわやかですがすがしいこと。
④ 手抜かりがなく周到なこと。
⑤ きりりとして勇ましいこと。

（2）b「鍛」の漢字の読みを、ひらがなで記しなさい。

（3）c「具体」の対義語を漢字二字で記しなさい。

問2　傍線部Ⅰ「その通りに書き出したのでは、間のびした表現になります。」について、それはなぜですか。その理由として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、解答欄にマークしなさい。

① 実際を書きすぎると、説明を繰り返すだけの長々とした散文詩になってしまうから。
② 実際の通りを書いたのでは、詩の書き出しが必要以上に説明的になってしまうから。
③ 出来事や風景をありのままに写し取ったのでは、詩が絵画的になってしまうから。
④ フィクションを盛り込みすぎると、表現に真実味がなくなりしらけてしまうから。
⑤ フィクションを盛り込むことによって、より論理的な詩にすることができるから。

問3　傍線部Ⅱ「ただ怖いのではなく読む人の存在をゆさぶって重く怖いのである。」とありますが、なぜ、「読む人の存在をゆさぶって重く怖い」のですか。その理由として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、解答欄にマークしなさい。

① すべての命は無常ではかないものであるということを、夜明けにしのびよる死の恐怖とともにさとらされるから。
② 生きものは、生物界の弱肉強食の原理の上に生かされている存在であるという恐怖を、強く認識させられるから。
③ 台所が命を料理する殺生の場所であり、絶え間ない生死の営みが日常的に行われていることを自覚させられるから。
④ 怖い生のありさまに触れ、生きること、生きていることについて、みずからに問いかけ深く考えさせられるから。
⑤ ありふれた日常を書いている詩の中にこそ、読む人の魂を断絶し動揺させる人生論的命題がおおく潜んでいるから。

問4　傍線部Ⅲ「そうした怖い生の様態」とは何を指していますか。その内容を四十五字以内で説明しなさい。ただし、句読点を含みます。

国語 6

問5 傍線部Ⅳ「その自嘲に生への慈悲と哀愁が流れる。」とありますが、Bの文章も参考にしながら、この時の「私」の気持ちとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、解答欄にマークしなさい。

① 明日になれば食べられてしまうことも知らずに精一杯生きている「シジミ」へのいつくしみを感じながら、しかし「私」もまた「シジミ」と同じ立場にいることを知ったときの物悲しい気持ち。

② 「鬼ババ」と「私」を同一化する視点を持ちえたことによって、今を精一杯に生きることの生きづらさを感じ、不意に訪れるかもしれない未来の死におびえおののく気持ち。

③ 「鬼ババの笑い」を笑った瞬間に「私」が「鬼ババ」になってしまったことの悲しさと、こうした自己矛盾をかかえながらも著名な詩人として生きていかなければならないわびしい気持ち。

④ 「シジミ」をひとつ残らず食おうとする「鬼ババ」の行為は、生きるという一点で命をいつくしみありがたくいただく行為であり、生きとし生けるものの貪欲さを厚かましいと思う気持ち。

⑤ 死の気配を感じることなく口をあけて生きている「シジミ」の姿に、死に抵抗できない無力なもののあわれを感じ、しかしその一方で「シジミ」の無抵抗の抵抗をふてぶてしく思う気持ち。

問6 傍線部Ⅴ「自己確立」とありますが、この言葉は、「石垣りん」の立ち位置（詩や生活への向き合い方）を表わす言葉です。言葉の意味する内容として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、解答欄にマークしなさい。

① 他人との関わりをいっさい持たずに自分中心の作品を書くこと。

② 顔も住所も名前もわからない無名なものたちの作品を書くこと。

③ 生活の具体相を詩に昇華させ固い意志と決意で作品を書くこと。

④ 詩に自分の実生活をとりいれた、ふてぶてしい作品を書くこと。

⑤ 厳しい環境と時代に警鐘を鳴らす、リアリズム作品を書くこと。

問7 本文の内容の説明として**適当でないもの**を、次の①～⑥のうちから**二つ**選び、解答欄にマークしなさい。

① Aの第三連三行「私は笑った」の笑う主体は「鬼ババ」と化した「私」であり、「ドレモコレモ／ミンナクッテヤル」は不可解なものの怖い生のありようを直感的につかんだ表現である。

② Aは「シジミ」と「私」をめぐる関係が、「ゆうべ」「夜中」「夜が明けたら」という時間の流れの中に示されており、しかも「シジミ」と「私」は同じように「夜」を過ごしている。

③ Bでいう「ひとつ残らず食う鬼のかなしみ、つらさ。」とは、夜が明けたら食われる「シジミ」の「かなしみ、つらさ。」であり、その世界がCの「生きるものの地獄世界」である。

④ Bの文章を読むと、「シジミ」には二つのテーマがあり、精一杯生きている「シジミ」をすべて食ってやろうとしている自分自身への問いが、テーマの一つとなっていたことがうかがえる。

⑤ Bの文章から、Aの創作背景とテーマの意図がうかがえるが、Cの文章からは、テーマが一つの文学表現として誕生するには詩の優位性と自己確立を必要としたことが理解できる。

⑥ Cの評者は石垣りんの生あるものへの慈悲と哀愁が、彼女の厳しい環境と時代に鍛えられたところから出てきたものであり、作品は表現上のリアリズムに到達していると考えている。

問8 次の①～⑤のうちから、詩集を**二つ**選び、解答欄にマークしなさい。

① 若菜集　② 道程　③ 舞姫　④ みだれ髪　⑤ 斜陽

〔三〕 次の文章は、作者が、失恋して落ち着かない気持ちを訴えようと詣でていた京都・太秦の広隆寺から帰る時のことを、後に回想して執筆したものです。文章を読んで、後の問いに答えなさい。

供なる人々、「時雨しぬべし。Aはや帰り給へ」など言へば、心にもあらず急ぎ出づるに、[注1]法金剛院の紅葉、この頃ぞ盛りと見えて、いと面白ければ、b過ぎがてに[注2]降りぬ。高欄のつまなる岩の上に下りぬて、山の方を見やれば、c木々の紅葉色々に見えて、Ⅰ松にかかれる枝、心の色も他には異なる心地して、いと見所多かるに、[注3]憂き故里はいとど忘られぬるにや、Bとみにも立たれず、Ⅱ折りしも風さへ吹きて、物騒がしくなりければ、d見さやうにて発つ程、

人知れず契りし仲の言の葉を嵐吹けとは思はざりしを

と思ひ続くるにも、[注4]すべて思ひ混ずることなき心の中ならんかし。

（『うたたね』による。一部改変）

（注）
1 法金剛院――京都市右京区にある寺。紅葉の名所。
2 過ぎがてに――通り過ぎることができずに
3 憂き故里――いとど忘られぬるにや――執筆時点の作者による評。失恋した相手とのつらい思い出がある出住先のことはますます忘れられたのであろうか、の意。
4 すべて思ひ混ず――すべて思ひ混ずることなき心の中ならんかし――執筆時点の作者による評。

問1 波線部Aはや帰り給へ」を、現代語訳しなさい。

問2 二重傍線部a～dの「ば」について、文法的にほかの三つと異なるものを一つ選び、対応する数字を解答欄にマークしなさい。

① a　② b　③ c　④ d

問3 この頃について、旧暦の何月ごろと考えられますか。最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選び、解答欄にマークしなさい。

① 六月ごろ　② 八月ごろ　③ 十月ごろ　④ 十二月ごろ

問4 傍線部Ⅰ「松にかかれる枝」に含まれる助動詞について、その文法的意味として正しいものを、次の①～④のうちから一つ選び、解答欄にマークしなさい。

① 受身　② 自発　③ 過去　④ 完了

問5 波線部B「とみにも立たれず」を、現代語訳しなさい。

問6 傍線部Ⅱ「折りしも風さへ吹きて」の解釈として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選び、解答欄にマークしなさい。

① 時雨が降る上にちょうど風までもが吹いて
② 周囲が騒がしい上にちょうど風まで吹いて
③ 紅葉が美しいのに折悪しく風までが吹いて
④ 恋人を思い出すのに折悪しく風まで吹いて

問7 本文の内容に合致するものを、次の①～④のうちから一つ選び、解答欄にマークしなさい。

① 美しい紅葉を見て失恋したことを忘れられたのに、あたりが騒がしくなって現実に引き戻され、いろいろなことをあわせて考えることがなければよかったのにと、執筆時点で回想している。

② 紅葉を吹き散らす嵐に、失恋した相手との言葉を吹き散らしてほしいとは思わなかったと考えたことについて、その時は他のことが考えられなかったのだろうと、執筆時点で回想している。

③ 帰りをせかされながらも、美しい紅葉に足を止めずにいられなかったが、これから出仕先に帰ることを思い、いやな思い出をすべて忘れられたらよかったのにと、執筆時点で回想している。

④ 紅葉の見所が多すぎてなかなか帰ることができず、出仕先のことは忘れることができたものの、失恋した相手の言葉が「嵐よ、吹け」だったとは思わなかったと、執筆時点で回想している。

問8 『うたたね』は、阿仏尼によって書かれた鎌倉時代の女流日記文学作品のひとつです。阿仏尼の夫の父・藤原定家が成立に関わったと考えられる文学作品を、次の①～⑧のうちから**二つ**選び、解答欄にマークしなさい。

① 宇治拾遺物語　② 栄花物語　③ 小倉百人一首　④ 古今和歌集
⑤ 新古今和歌集　⑥ 土佐日記　⑦ 枕草子　⑧ 万葉集

MEMO

MEMO